

平成20年（第53回）秋田県文化功労者

（年齢順）

学 芸 （郷土史の研究・発掘） 渡 邊 喜 一

民生・社会福祉 （児童の健全育成・民生活動） 中 嶋 喜 代

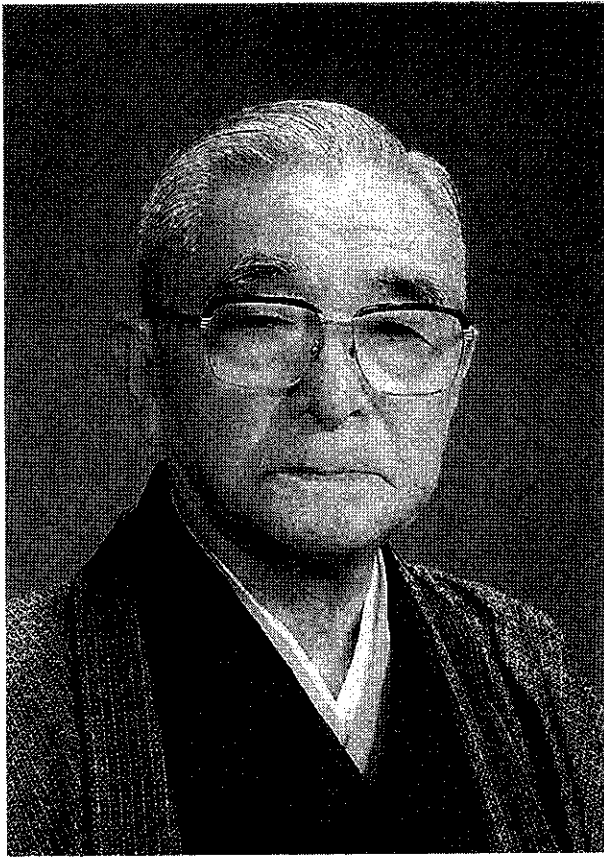
美術・工芸 （書芸術の創造・後進の育成） 大 井 武 司

技 芸 （茶道の普及・発展） 辻 大 圓

産 業 （地域商工業の振興・発展） 岩 佐 佳 政

教 育 （教育研究の充実・高等教育の発展） 三 浦 亮

美術・工芸 （まんが文化の発展・振興と地域興し） 高 橋 高 雄



郷土史の研究・発掘

わた なべ き いち
渡 邊 喜 一

(88歳)

住所
秋田市

平成5年に「新編佐竹七家系図」、平成14年に「新編佐竹氏一門系図・稿」を編著する。これは佐竹姓の(峯岐・式部・左近・北・東・南・西)七家と一門で引渡家格(石塚・大山・戸村・今宮・小野岡・古内・岡本)各氏の系譜を著したものである。この両著は、佐竹氏研究に携わる者にとっては必須の手引書といえるもので、古記録や断片的であった諸系図が集大成されたものである。歴代個人ごとの出自、名称、役職などの記述や法名号一覧により人名特定につながる時代背景・考証資料としても貴重である。

また、肝煎として優れた村の指導者で、明治維新前後の世相を克明に記録し、仁医として近郷で慕われた有徳の人物であり、旧昭和町で石川理紀之助と並び顕彰される先覚・菅原源八(寛政6年～明治12年)の遺作の原本50余冊に長年取り組み、「菅原源八遺作全集上・中・下」(平成7年)を編著し(新秋田叢書Ⅲ期10・11にも一部を収録)、その存在に光をあて、広く知らしめた。

上記の研究基礎ともなった古文書の解読力は、秋田県立図書館嘱託(古文書担当)14年の経験によるもので、各種研究団体、個人所蔵の文書等の数多くの解読依頼に応えており、この分野での功績も大きい。



児童の健全育成・民生活動

なか じま き よ
中 嶋 喜 代

(87歳)

住所
北秋田市

昭和28年「子どもを守る会」を町内に結成し、母親が連携して子ども会を育成する基盤を築き上げ、昭和30年から30年間にわたり青少年健全育成鷹巣町民会議の会長を務めるなど児童の健全育成に貢献する。

また、鷹巣町の婦人会長として昭和55年に鷹巣中央公園にあじさいを植樹し、「あじさい交流会」を実施した。昭和60年には「ふるさと踊りと餅っこ祭」を発案し実施した。これらは、現在も市のイベントとして大きく発展している。

このように、児童の健全育成をはじめ、婦人会活動を通じての健康づくり・環境衛生・交通安全等の民生活動、また、商工会活動と数多くの地域づくり活動をした。

さらに、昭和59年には、鷹巣女性史研究会を発足させた。その活動として、終戦、生死の境を超えて帰国した生きる力、窮乏期の家計のやりくり、新生活運動等女性の存在感に着目し有志とともに結成した同会は、新生活運動と女性の社会進出の足跡を掘り起こし、町婦人会史をはじめとする研究図書を4冊発行した。これは、地域の重要な歴史資料でもあり、平成18年度秋田県芸術選奨特別賞を受賞した。



書芸術の創造・後進の育成

おお い たけ し きんてい
大 井 武 司 (錦亭)

(81歳)

住所
東京都

昭和28年金子鷗亭先生（後に文化勲章受章）に師事。師と共に三省堂にて活字デザインに従事。同社でペン字執筆。以後、日展入選連続22回を重ねながら、書芸術の研鑽に専念した。

当代の書壇は漢字と仮名と專業豁然かつぜんと区分されている。もともとは、書の芸術は漢字の母国中国も、我が国の奈良時代から江戸時代への歴史においても区分を立てることはなかった。そんな中、大井氏は書法における各体の悲壮入魂の習熟により「心」「眼」「技」三位一体を完成させる。いかなる書体をも極めた稀有の作家である。

また、近代詩文作家協会の理事長を務め、書の創造と美の探求に飽きることなく邁進している。現代書の世界における孤高傑出の巨匠と言われるゆえんである。

秋田市土崎港に生を享け、小学校三年生まで過ごす。今以て、故郷への追憶と愛着は変わらず、この間地元土崎を始め県内各地で展覧会や出品を行っている。

平成19年には、秋田県立近代美術館にて「生命の証・魂の書、大井錦亭展」を開催し絶賛を博した。

平成14年からは、秋田魁新報社主催の秋田書道展主査審査員として本県書道界の発展に尽力している。

また、日展参与、毎日書道会常任顧問として、我が国最高峰の展覧会の育成と芸術の振興に大きく寄与している。



茶道の普及・発展

つじ だい えん そう げつ
辻 大 圓 (宗月)

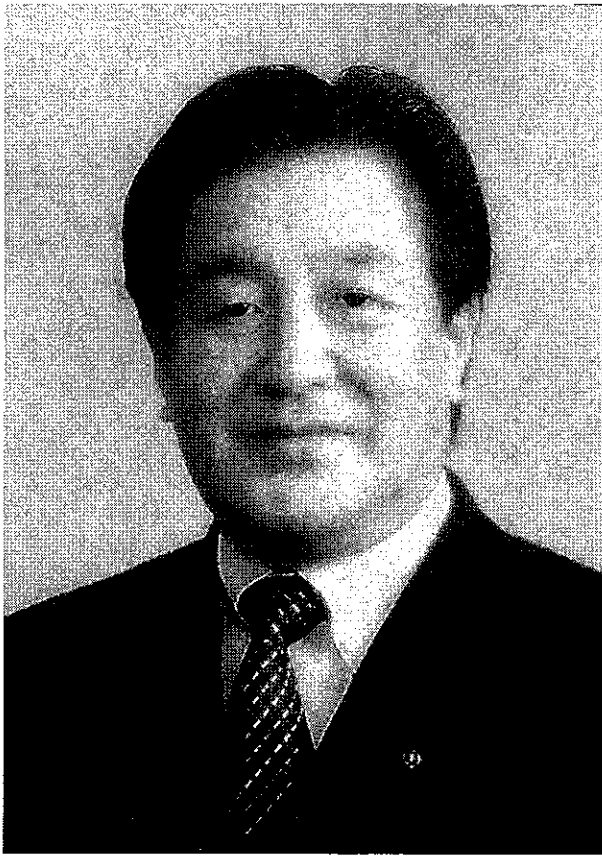
(80歳)

住所
秋田市

昭和24年、茶道裏千家に入門。創立初期以来、秋田支部の企画運営に励み、昭和28年の第1回東北地区大会の実行委員長として大会を成功に導き、昭和53年より秋田支部幹事長として、支部茶会内の機構を改善し、近代的な会の組織づくりに貢献する。

また、県や市の社会教育に於ける茶道の講師として、市内外の公民館等で講座を持ちながら茶道の普及に努めている。

毎年継続的に実施している千秋茶会は、今年で30回を数え、秋田市芸術祭合同茶会は51回目となり、いずれも会長として長年の間、後進の指導育成に尽力するなど、本県の芸術文化の振興発展に大きな功績を残している。



地域商工業の振興・発展

いわ さ よし まさ
岩 佐 佳 政

(72歳)

住所
横手市

昭和33年(株)松屋に勤務。昭和36年先代・信七氏が創業した富久屋呉服店に入店。翌37年(株)富久屋を設立し、専務として社長を補佐するかたわら、横手市商工業に携わる若手経営者・後継者等で組織された横手青年経営者会に入会、事務局長・副理事長を経て昭和50年には理事長に就任、地域経済界の将来の指導者としての地位を確立した。昭和63年(株)富久屋代表取締役就任し、現在に至っている。

商工会議所関係では、昭和55年に議員に就任し、5期15年、さらに平成7年には常議員に就任、1期3年、ついで、平成10年11月には筆頭副会頭に就任。翌11年7月には第18代会頭に就任し、以来4期9年、横手商工会議所会頭として「地域経済の振興」と「会員事業所の支援」という2項目を最大目標に、財政基盤の確立や組織拡大に尽力したほか、公正な立場で横手市商工業界の指導的役割を果たし、地域振興に尽くすなど、地域経済の牽引役を務めている。

その間、昭和59年1月から、横手市教育委員、昭和62年1月からは、教育委員会委員長職務代行者として、児童の健全育成や学校設備の改善、学区制の再編検討など、教育行政に多大な貢献をした。

一方、衰退の著しい中心市街地の活性化を図るため、平成14年1月には、横手市と民間で出資し設立した「タウンリノベーションよこて(株)」の代表取締役就任、四季折々の創作菓子・料理や「よこて手の市」、よこての全国線香花火大会の仕掛け人等、ソフト事業を中心に活動を展開し、横手市民にもよく知られた存在となっている。

さらに、商業・街づくり・観光・雇用労働・交通等多くの分野でも積極的に関与し、それぞれの団体のトップあるいは役員を務めるなど、常に横手市の将来を見据えた識見と行動力は各方面から高く評価されている。



教育研究の充実・ 高等教育の発展

み 三 浦 あきら 亮

(72歳)

住所
秋田市

昭和46年秋田大学医学部に着任、昭和53年教授、平成10年から医学部長。平成13年2月秋田大学長に就任し、平成20年3月に任期満了にて退任。長年にわたり、数多くの優秀な医師・研究者を育て、自らも医師として血液疾患の最先端医療を担ってきた。秋田大学学長就任後は、人材の育成、研究の発展に加えて、地域貢献を大学の重要な使命と位置づけ、県民の生涯学習、地元企業との共同研究等に力を注いだ。さらに、地域の要請も踏まえて、大学院工学資源学研究科の設置、医療技術短期大学の4年制化(医学部保健学科の設置)、産学連携推進機構をはじめとする学内施設の整備拡充に尽力し、教育研究・地域貢献の充実に努めた。

また、世界的な研究拠点形成を目的とした大型プログラムである「21世紀COE」及び「グローバルCOE」、並びに「特色ある教育プログラム(GP)」のいずれも導入初年度から採択されるなど顕著な指導力を発揮した。

平成14年には県内4年制3大学単位互換協定を結んで積極的に地域の高等教育の活性化を図った。平成17年には秋田県内の高等教育機関の連携・交流、地域の発展に貢献することを目的とした「大学コンソーシアムあきた」設立に尽力し、その中心的な役割を担うとともに、初代理事長としてその礎を築き、目的を十分に果たしている。

学外の団体においては、「あきた総合科学技術会議会長」「秋田県国際交流協会理事」「秋田商工会議所顧問」「秋田県地下資源開発促進協議会会員」等、数多くの審議会等の役職・委員を務め、秋田県内の教育・産業・文化等の発展に貢献した。



まんが文化の発展・ 振興と地域興し

たか はし たか お やぐちたか お
高橋 高雄 (矢口高雄)

(69歳)

住所
東京都

昭和45年まんが家としてデビュー以来、ひたすら「ふるさと秋田」にこだわり、ふるさとの豊かな自然をフィールドとして人・風土にまつわるドラマを描き続けていることが、多くのファンを魅了し続け、日本固有のまんが文化発展に大きな足跡を残すとともにまんが界において絶対的な信望を得ている。

一方、日本の「まんが文化」を国内外に発信する「増田町まんが美術館」構想に、建設から運営に至る幅広い分野で尽力し、まんがを通じた地域間・世代間交流による夢とロマンに満ちあふれたまちづくりに大きく貢献したことをはじめ、県内自治体・企業等の様々な企画事業や講演にも協力し、県勢発展を側面からサポートしている。

また、代表的な作品「釣りキチ三平」が、秋田県産米「あきたこまち」や横手市産の青果物の容器シール等のキャラクターとなり、「釣りキチ三平」の持つ自然豊かな情景のイメージと自然の恵みである青果物のイメージがマッチし、地元青果物の販売促進と地元農家の生産意欲に大きく貢献している。

更に、合併後の横手市を国内外に広くPRするため制作した観光ポスターが、平成20年度日本観光ポスターコンクールで「特別賞(イラスト賞)」を受賞するとともに、来春、「釣りキチ三平」の映画公開が決定し、県内ロケを通じて本県の観光等への誘客に貢献するなど、秋田の発展に多大な功績があった。